

## 船越義珍先生のこと

先生から「松濤館流と言うものはありません。」「私は、安里安恒さんと、糸洲安恒さんに教わったことを人に教えただけです。」と幾度も直接に伺った。

それは事実大先生が大正11年日本に來られて空手を公開された後、小石川の沖縄県人寮の明正塾に入られ、最初は書道を教えておられた。先生は沖縄時代から書の雅号を「松濤」と付けておられたが、少しして空手を教えられ、やがて先生と、弟子たちも協力して昭和12年目白の河村学園の裏に道場を新設された。先生言によると道場の名を「弟子の人たちが、わたしの号で、松濤館が良いではないですかと言うのでそれにした」とのことであった。そして「そこで盛んに稽古が行われることとなり、次第に人がそこで行われる空手を松濤館流と呼ぶようになっただけのことで、流派ではないのです。」とはっきりしておられた。

今、あらためて大先生が多くの意味で雄大且つ偉大であられた事を思う。慶應に限らず古い空手の方はよく承知していることだが、先生が屢々強調されていたことでもあり、最も先生と関係の深い慶應ではこれを間違えて他に伝えることのないよう正確性に注意して伝え残してゆく必要がある。

先生にはご子息が四人おられた。名前の頭に全て義珍の義を付け次の字に、英雄豪傑のうちの一文字を上から順につけ、従って三男には「義豪」(よしたか)と付け、私はお目にかかっているが、この方が組手の大変な使い手であられた。大先生の師範代として三田の稽古にもしばらく見えて、引き手は高く胸の横へ、拳の握りは人指し指の節も全て折り曲げて(大先生は人さし指の第一関節はのばしていた。)、その他上段受けで相手の手首を取って、自分の引手の位置へたぐりよせて逆の手で決め手を入れることは無理であることなど教えられた(大先生は腰を鍛える一面も考えて居られたと思うが)(空手部75年史、及び「拳」に記載)。それ等は事実上、大先生の指導の否定である。それを道徳的観念で捉えたら世の中の進歩は止まってしまうこととなり人は不幸となる。とにかく迫力と実力があって当時ややマンネリ化していた若い部員たちは大変に引き付けられたらしい。又、拓大、早稲田も義豪先生に大変に傾倒したそうである。

義豪先生については「慶應義塾体育会空手部七十五年史」153～4頁、及び32頁下段にある通りであり私も「拳」第七号の中原さんの記事を読んでこれに書いたことがあり、関心が強い。

結局慶應も義豪先生から直接に指導を受けたことを幸せととるにいたったようである。一般的に、武道、格闘武術の中で、勝敗がはっきりしにくいものに形が発達する。代表的なものが空手であった。剣道にも一部残されている。柔道、相撲にはかすかに残っている程度である。形には基本を改めて見直し改めて知るという大切な意味がある。

慶應の空手は昔から戦後もしばらく、形の慶應と言われて来た。明石彰さん、山本孝信さん始め多くの形の名士を排出している。しかし現役部員では一部を除き今その面影は殆ど薄れた。一つは他校の形の腕が上がったからでもある。やはり慶應は、試合は勿論であるが、形の慶應の伝統も是非守って行きたい。